2002.08.19 ～ 2010/04/15 更新

あいさつ
―「挨拶のことば」―

萩原　義雄

はじめに

柳田國男は、『**毎日の言葉**』(新潮文庫刊)の「あいさつの言葉」の章で、

「挨拶」は禅僧が支那から輸入した近世の漢語で、挨は押す、拶は押しかえす、元は単に受け答えという心持しか無く、礼儀の感じは含んで居なかったようです。

と述べています。そして、「人が顔を合わせて物を言わぬということが有り得ませんから」それに相当することば表現を模索し、「言葉をかける」や「声を掛けた」、名詞でいえば「物言い」がこれに相当することば表現としています。そして敬意を払い、「物申す」の「モノモウ」(室町時代)なる語が用いられてきたというのです。さらに、

現在我々の用いて居る「今日は」や「今晩は」などは、形として不完全で、外国人ならば大抵は不審に思うのですが、事によると是も使用の区域が広くなった爲に、はっきりとしまいまで言ってしまうことの出来ぬ事情が有ったからかも知れません。

1、「おはようございます」

「オハヨウ」は、

本来早く起き出したねと、相手の勤勉を感嘆する意味でありました。それ故に八時九時に顔を洗いに出るような朝寝坊に対しては、今でも気の細かい人は、微笑を帯びてで無いと此語を発せません。(上記資料)

つまりは朝起きを賞嘆したのが始めであります。乃ち惰け者に向って言うと皮肉しか聞こえなかわけで、従って少し遅くなると之を略し、すぐに天氣の事を言うのが田舎では普通であったのであります。(上記資料)

とありますように、遅くとも人が活動し始める午前八時前に声を掛け合うものでありました。この時間を過ぎて人と顔を合わせる場合には、「オハヨウございました」と過去形で表現したものです。現代人の「おはよう

ございます」は、そうした朝早起きを賞嘆する意味合いが伝わらずに、朝出会えば「おはよう」と声をかけ合い、一日の始まりとする“気遣いことば”と化しています。ですから、その日はじめて顔を合わせれば、昼でも夜でも「おはよう」と言います。この言い方は、江戸時代の歌舞伎界から始まり、現代の芸能界・放送業界、果ては水商売から今では大学生までに浸透してきています。バンカラ学生の用語では、昭和の頃までは「オッス」という略語表現があったが、今は聞かれない言葉のようです。さらに現代では、親愛性の表現を持たせてか、「オッハー」といった略形の表現もテレビ番組を通じて全国的に普及していることも事実でしょう。

2、「こんにちは」

「コンニチワ」は、

天気の批評は種類が多く、又実際に即して居ますから、「今日は」見たように空虚には聞こえませんが、是が昔からの早朝の物言いではなかったことは確かで、何か其前にもう一つ、早起きをせぬ者にも通用するようなのが有った筈であります。（上記資料）

とありますように、このことば表現には幾つもの言い回しが略されているからでしょう。これを「余意」や「余情」として、わたしたち日本人が感得できるからにほかなりません。たとえば、

こんにちは、好いお日柄ですなぁ。

こんにちは、お暑う〔お寒う〕ございますなぁ。

こんにちは、丁度いい時分にお湿りがあって好うございましたなぁ。

といった塩梅に「こんにちは、」の後半部分を読み取る能力を聞く側も備えているからなのです。ところが、この「コンニチワ」ですが、どうも外国の人にとっては「余情」性の理会がむつかしいのか旨く馴染まなかったのも事実です。とはいえ、昭和四十五年の三波春夫さん歌う「日本万博テーマソング」や歌手の梓みちよさんが歌った「こんにちは赤ちゃん」などは、このことばを活気溢れる、爽やかさをもって日本国中に伝播されたものでした。

落語では、庶民の会話としてこの「こんにちは」をさらに省略した「ちわー」なんて言い回しが使われています。

3、「こんばんは」

「コンバンワ」は、

訪問辞は東京の「今日は」、「今晩は」のように、時刻に相応した途上の挨拶を、其まま流用する人が

多くなりましたが、是は我々の家が小さく浅く、先ず案内を乞う必要も無くなってから後のことと思われます。(上記資料)

とありますように、柳田國男の指摘は正しいものでしょう。東北・北海道では、ただ「今晩は」ではなく、「お晩でございます，ございます」と相手に敬意がこめられています。日が暮れ、黄昏て相手の顔を肉眼では判断できない日没の時分に、声を掛けずに過ぎ去ろうとする相手に、その人影(シルエット)を目当てに「たそかれ【誰そ彼れ】」と呼び合うものでありました。やがて、夜でも提灯そして電燈が点り，辺りを明るく照らすようになりますと、相手の顔も昼間のように見ることができます。こうなると、「たそかれ」ではありませんから、「今晩は」が用いられ始めたのでしょう。これも「今日は」と同様に、

こんばんは、何処へお出かけですか？

こんばんは、何をなさっておられますか？

と言ったように、後半部分を省略し、その気持ちを相手に伝えるものでありました。そして、時刻が遅くなればなるほど、相手の帰宅時間などに心配りして表現することばでありました。

さいごに

「おはよう」「おはようございます」の挨拶表現は、自身の父母に対しても用いることができます。ですが、「こんにちは」「こんばんは」の挨拶表現は、どうも使い勝手が違うようです。親に向かっては言いがたい。本統の親でもたとえば、長い間留守をしていて、ひょっこり帰ってきた場合は例外です。写真でしか見たことの無い親との再会ですから、子どもは思わず咄嗟に「こんにちは」「こんばんは」と口をついて表現してしまいます。すなわち、一つ屋根の下で暮らす親子にとっては、この挨拶は必要としないことがこのことでもわかります。では、他人さまであれば、誰とでも用いられるのでしょうか？近所のおじさん・おばさんは良いでしょう。勤め先の同僚はどうでしょう。朝から夕方まで机を並べて働いている相手に、いくら遅刻して出勤したとしても、「こんにちは」とは用いないのが通例なのです。勤め先で「こんにちは」と用いる相手は、あくまで外部の人間でしかありえません。昼飯時に出前のピザ屋さんだったり、出入りのお得意様だったりです。学校でもそうです。いつまでも「こんにちは」「こんばんは」と言っていたら、自分の仲間意識はいつになっても確立されていないことに気づかねばなりません。親しき仲にも礼儀ありのあいさつ言葉ですが、その用い方は能々相手と時分との関係を考えて用いるべきでしょう。

[ことばの実際]

室町時代の資料、改修『捷解新語』に見えるあいさつ言葉

◎主「こんにち(今日)わてんきもよう御さつて。御はなし申ましてよろこはしうそんしまする」

○「こんにち(今日)わおりふしつかゑか御さつて御めにかかりゑませいて」

○「こんにち(今日)わかやうに御ちそう(御馳走)の御さつたことお」

◎主「こんにち(今日)わひよりもよし、御たかいにゆるりといたして、われわれもうれしう御さる」〔三35ウ③〕

江戸文学『浮世風呂』に見えるあいさつ言葉

○△ばんとう「どなたもお早うござります。

○△ばんとう「御隠居さん、今日はお早うござります。

○点兵衛「これは／／　鬼角さま。お早うござります。

○△おさみ「ヲヤ、お鯛さん。お早うございますネ。夕は嘸おやかましう。

○「ハイ、お早うございます。一両日はけしからぬお寒さでございます。お杉さん、お出かネ。ヲホ、、、、、。

いつも御げん氣で能ぞ。お玉さん、けふはお手習はお休かへ。

○△どろ「おしたさん。お早うざいますネ。どうないましたヱ。

○おさみ「アイヨウ、お撥さんか。お早いの△ばち「お早いじやアねへはな。おめへといふものはしよにんな者だの。さうしなせへ。〔勤勉さの意〕

○△やす「ハイ。お供で參じましたから、今日は早うございます。

◎△やみ「ヤ、俳助さん。お早うございました△はい「くらくてわからぬゆゑ顔をすかし見てヤ、是は／／。闇雲屋の吉郎兵衛さん。お早うござります。扨はや、お結構なお日和様でござります。おまへさんはいつも御丈夫さまで、お仕合様でござりますぞ。ハイ／／、此お天氣の御都合は申ぶんなしぢやが、お暑さはどういたしたものでござりませう。

十返舎一九編『東海道中膝栗毛』のあいさつ表現

○けふは爰もとの名どころ一見せんと、したくするうち、ばんとう出て「コレハおはやうござります。今日はどつちやへぞおこしでござりますかいな。さよなら御案内のものおつれなさるがよござりましよ。

明治時代、アーネスト・サトウ編『春秋雑誌　会話篇』（明治六(1873)年刊）のあいさつ表現

○一、へい　だんなさま　お　はやう　ございます　二、なん　どき　だ〔第四章11オ六〕

○イエ色々　御馳走に預りまして私こそ却て今日(こんにち)ハ能御早御出掛なさいました〔第十六章6ウ一〕

○ア、今日(こんにち)ハ良天気だから御覧なさい　マア参詣の人の多事〔第十六章7ウ五〕

○今日(こんにち)ハ天氣が能て御出立には至極結構で御座います〔第十八章25ウ三〕

○今日(こんにち)ハ御昼休ハ何処に致しませう〔第十九章42オ三〕

○今日(こんにち)ハ能快晴致しました〔第廿三章81オ四〕

○今日(こんにち)も快晴で御座います〔第廿三章82オ三〕

○今日(こんにち)ハ些風立ました〔第廿三章82ウ二〕

《課題2》ふだん何気なく交わしている「挨拶ことば」について考えてみましたが、実際「挨拶ことば」として現代日本人が交わす「オアシス」標語でいう「おはようございます」「ありがとう」「失礼します」「すみません」をテーマに私たちの日常生活そのものから問い直していきましょう。「あいさつ」は、得体の知れない人と人が出会ってまず交わすことが必要なのでしょう。

相互の気持ちや意図や正体がちらっと見え始めるのがこの「あいさつことば」の得意とするところです。少なくとも自分が相手に敵意や害意を抱いていないという意思の表明ですから、とりわけ多く発したい「話しことば」なのです。貴方は、今どんなふうに表現なさっているのでしょうか？